

# 都市史研究

THE URBAN HISTORICAL SOCIETY OF JAPAN  
 VOL. 70 2012  
 0325

暑さ寒さも彼岸までと申しますように過ごしやすい季節となりましたが、皆さまますますご清栄のこととお喜び申し上げます。本年最初のニュースレターとなるニュースレター都市史研究70号をお届けいたします。

本号では昨年12月に開催いたしましたシンポジウム「危機と都市」に関するご報告と、年報都市史研究19号のご紹介をさせていただきます。

本年度は本号が最終号となります、2012年度以降も都市史研究会の活動にご理解とご協力のほどをよろしくお願ひいたします。

## 都市史研究会シンポジウム「危機と都市」

2012年12月3日、4日、東京大学工学1号館15号教室にて都市史研究会およびとらっど3の共催によるシンポジウム「危機と都市」を開催いたしました。当日は伊藤毅氏（東京大学）による主題報告にはじまり、柏木まどか氏（東京理科大学）、本島和人氏（飯田市歴史研究所）、青井哲人氏（明治大学）、吉田伸之氏（東京大学）、三枝暁子氏（立命館大学）による研究報告が行われました。以下に参加記を掲載いたします。

### 参加記

昨年12月3日、4日の2日間にわたり、都市史研究会ととらっど3主催によるシンポジウム「危機と都市」が開催された。冒頭で主題報告がなされたのち、両日を通じて計5名の報告者による研究報告が行われ、最後に全体討論が行われた。全体を通じて、司会進行は松田法子氏と武部愛子氏が務めた。以下、2日間にわたる各報告と議論を振り返りつつ、若干の感想を述べたい。

一日目、まずは伊藤毅氏（東京大学）により主題報告がなされ、本シンポジウムのテーマを「危機と都市」とした意図が述べられた。昨年の東日本大震災によって、我々は近代社会が作り上げた都市の脆弱さを思い知らされた。日本では1959年の伊勢湾台風以降、1995年の阪神大震災まで大規模災害は起こらなかったが、その約40年の間に日本人は自然の驚異を忘れ、危機に対して鈍感になっていたのではないかと指摘した。ここでいう危機とは、単に自然災害だけでなく、経済危機や内紛等も含まれる。都市とは本来危機を内包した存在であることを確認したうえで、都市史研究の立場から「危機」を捉えることの意義を論じた。

つづく柏木まどか氏（東京理科大学）は、「関東大震災復興期の共同建築」と題して、大正から昭和初期における都市不燃化の試みについて論じた。連続する複数の土地の使用権者（土地所有権者または借地権者）

が共同して建てる「共同建築」の制度が、当時の東京市民が抱えていた資金不足、極小敷地、借地人という三つの問題を解決し、彼らの自主的な耐火建築実現に寄与したことを明らかにした。

本島和人氏（飯田市歴史研究所）の報告「三六災害と飯田・上飯田—『丘の上』近代化と大水害—」では、昭和36年に長野県伊那谷を襲った梅雨前線豪雨による三六災害に注目し、城下町飯田の近代化・都市改造と大災害との関わり、飯田耐火後の防火都市建設と仮設住宅・公営住宅の供給と被災との関係が論じられた。被災の危険性が高いにも関わらず未だに使用され続けている公営住宅など、市は今後も検討してゆかねばならない問題を抱えている。

二日目は、青井哲人氏（明治大学）の報告「再帰する危機と集落—三陸漁村の20世紀」から始まった。「再帰」とは、繰り返される津波被害と、20世紀のリスク制御技術に対して用いられている。青井氏は昨年の東日本大震災を受け、三陸海岸の集落が過去に経験した大規模な津波災害とその復興の記録を調査し、それらの情報をweb上で公開している（<http://d.hatena.ne.jp/meiji-kenchikushi/>）。その中から、本報告では岩手県南部の事例を取り上げ、集落の二重化（多重化）と漁港村への変容によって、20世紀の三陸漁村が形成されてきた過程を明らかにした。

つづいて吉田伸之氏（東京大学）の報告「安政江戸地震と浅草寺寺院社会」が行われた。史料として『浅草寺日記』26（安政2）～31（文久2）巻を用い、安政江戸大震災における浅草寺寺院社会の被災状況とその後の実態を紹介し、民衆社会においては「危機」に乗じて利益を得ようとする様々な動きが見られたことを指摘した。

三枝暁子氏（立命館大学）は「天正・慶長の大震災と京都改造」と題し、豊臣秀吉による京都改造の前後に起こった二つの大地震に注目し、中世京都における地震と都市改造の関わりを検証した。在京しない領主・秀吉のもとで、京都は震災から復興し、改造されていった。従来、秀吉による京都改造は肯定的に評価されてきたが、被災した京都の民衆の立場から捉えなおすと、また別の一面が見えてくる可能性を示唆された。

最後に、報告者全員を壇上にむかえて全体討論が行われた。都市史の観点から「危機」を捉えるにあたり、時間と空間をどのように扱うべきかを中心に議論がなされた。そして、これまで専門・分化して進められてきた災害史の研究が、今後統合されてゆく必要性が訴えられた。

今回のシンポジウムにおける5つの研究報告は、対象とする都市や時代、危機の内容は様々であったが、全報告を通じて絶えず3.11を想起させられた。全体討論で蓑原敬氏（蓑原計画事務所）が指摘されたように、今後こうした都市史研究の成果が復興の現場に伝えられ、実際の政策に生かされてゆくことを期待したい。

長谷川香（東京大学大学院工学系研究科）

## 出版物のご紹介

2012年3月、山川出版社より『年報都市史研究』19号が刊行されました。特集といたしまして、2012年12月に都市史研究会およびとらっど3共催により開催いたしましたシンポジウム「伝統都市論」を取り上げています。

以下に内容をご紹介いたします。ぜひご一読ください。

**都市史研究会編『年報 都市史研究』19号 山川出版社 2012年3月25日刊行**

特集 伝統都市論

シンポジウムの開催について

石井規衛 都市史研究のイデアにむけて

五味文彦 『伝統都市』を読んで

近藤和彦 『伝統都市』と都市史の可能性

陣内秀信 比較の視点からの「伝統都市」再考

高橋康夫 『伝統都市』全四巻を読む

吉田伸之 『伝統都市』全四巻の刊行を終えて

伊藤毅 私的『伝統都市』成立小史——リプライにかえて

ラウンドテーブル討論の記録

論文

登谷伸宏 陣中から惣門之内へ——公家町の成立とその空間的特質

研究ノート

角和裕子 江戸の粉屋と水車稼人

小特集 十七～十九世紀、中国の都市と商人

吉田伸之 小特集にあたって

王振忠（箱原儀之訳） 清良国期の江南の徽館——杭州と上海を事例にして

井上徹 明末の商税徵収と廣東社会

熊遠報 北京の歙県会館——明清時代徽州商人の北方拠点を中心に

新刊紹介

馬場基著『歴史文化ライブラリー288 平城京に暮らす——天平びとの泣き笑い』

西山良平・鈴木久男編『古代の都3 恒久の都平安京』

高橋慎一朗著『中世都市の力——京・鎌倉と寺社』

仁木宏著『京都の都市共同体と権力』

川嶋将生著『歴史文化ライブラリー309 祇園祭——祝祭の京都』

田中康雄編『江戸商家・商人名データ総覧』全七巻

岩淵令治編『史跡で読む日本の歴史9 江戸の都市と文化』

中嶋久人著『首都東京の近代化と市民社会』

坂根嘉弘編『軍港都市史研究1 舞鶴編』

大宅明美著『中世盛期西フランスにおける都市と王権』

北河大次郎著『近代都市パリの誕生——鉄道メトロ時代の熱狂』

ラウンドテーブル

藤野裕子 “Bad Youth”と東京の近代——デイヴィッド・アンバラス氏を囲んで  
時評

伊藤毅・吉田伸之 現代都市事情13——東京大学、ふたたび

## 京都市北区長乗東町

岩本葉子（東京大学）

まったくの私事ではあるが、タイトルに挙げたのは一年ほど前から筆者が生活の場としている町の名である。

京都には個性的な町名が数多く残されている。例えば、血洗町や悪王子町といった町名にくらべれば上記の町はそれほどのインパクトはないものの、この町名を初見で正確に読める方は意外と少ないのではないだろうか。実は筆者自身、音読みするべきか訓読みをするべきか迷ってしまった。正式な読み方は「ちょうじょうひがしまち」とのこと。京都において「町」を「まち」と読むのも珍しいとともに、「長乗」とはなんなのだろうかという疑問を抱いた。

京都の町名の由来については既に多くの著作が刊行されているが、縁あって生活の場となった長乗東町についてその由来をまとめてみたい。極めて個人的な興味にもとづくテーマで恐縮ではあるが、この駄文をもってエッセイとして寄稿させていただくことをお許しいただきたい。

### 長乗東町の概要

まず長乗東町の位置から紹介すると、京都中心部から北に位置する東西の通り、鞍馬口通の室町以西、新町以東（図1）。同じく新町以西には長乗西町も存在する。

最古の京都図とされる『京都図屏風』では東西の町をまとめて「長乗うら町」と記している（図2）。なお、当時の鞍馬口通は洛中の最も北側の通りで、長乗裏町から西へ



図1 長乗東町の位置（国土地理院2万5千分の1地図より）

進めば鞍馬口、北へ進めば清蔵口へつづく。まさに洛中の縁、洛外の北方へ伸びる街道の出入口に位置していた。また、図3では「あたらし丁」という名称ももちいられている。洛中の北辺に位置する長乗うら町は当時としては比較的新しい町だったようだ。

さらに時代がくだって元禄末期になると「長乗裏丁東半」「同西半」に分けられている（図4）。この時期には二つの町に分割する必要があるほど人口が増えていたのだろう。その後も「あたらし丁」や「長乗うら丁」の呼称

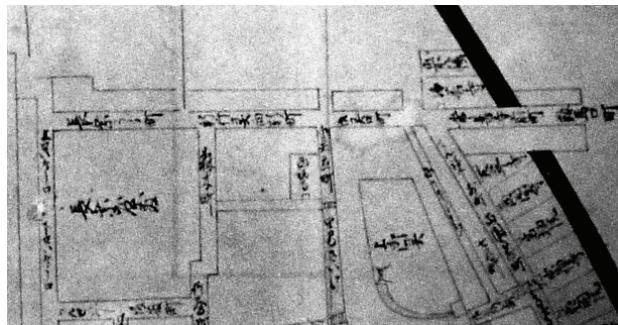


図2 1620年代（「京都図屏風」）

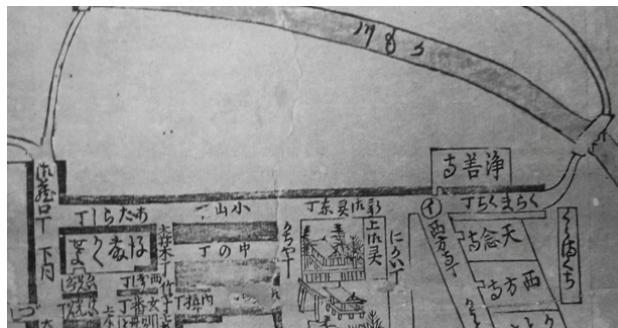


図3 1654年ごろ（「新板平安城東西南北町并洛外の図」）

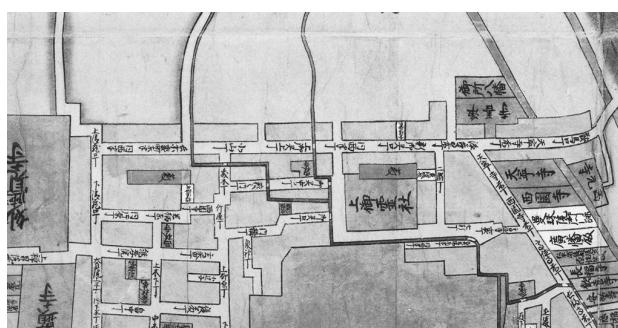


図4 1701年ごろ（「元禄十四年実測大絵図」）

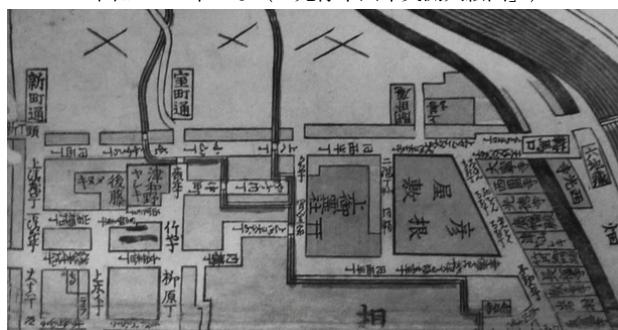


図5 1831年ごろ（「京町絵図細見大成」より）

も用いられながら明治を迎える。「長乗東町」「長乗西町」の名称が固定されたのは明治以降、おそらく地租改正などが行われる明治0年代となろう。

### 後藤長乗と長乗裏町

『京都坊目誌』では長乗東町の町名起源について次のように記している<sup>1</sup>。

中古後藤長乗の開地する所なり。故に長乗町と云ふ。

延寶町鏡に新し町とし。世人長乗裏町とも呼ぶ。其數長乗東半町と稱し明治初年。半の字を去る。

つまり、後藤長乗という人物が開いた町であると伝えている。この後藤長乗について、筆者は恥ずかしながらまったく不勉強で、今回はじめて知ることとなった。後藤長乗は近世初頭に活躍した彫金師で、既にご周知の読者も多いことと思われるが、筆者自身の整理を兼ねて少し詳しく紹介させていただく。

後藤家の初代祐乘は足利義政に仕え、以降後藤家は時の権力者の御用を勤める彫金の家系として代を重ねていく。そうした中で5代目徳乗は豊臣秀吉に仕えたが、関ヶ原以後、徳川家康に任用されたのが徳乗の弟、長乗である。長乗は家康に後藤本家の赦免を働きかけ、後藤本家は後に大判座を組織するなど、江戸幕府の金工史上大きな役割を果たしていく。

一方で、長乗自身も洛中に屋敷地を与えられ、後藤勘兵衛家の祖となった。これが図2で長乗裏町の南側にある長乗屋敷である。この屋敷については後世の記述としていくつかの伝承がある。たとえば『京町鑑』にはこの屋敷地について後藤徳乗（長乗の父）以来の屋敷地で、元は細川勝元の居館とある<sup>2</sup>。この内容に対して後藤勘兵衛家の10代目丈太郎は、元は細川満元邸で、慶長期に万石以下の知行の代りに長乗が受領したものとしている<sup>3</sup>。この他に『京羽二重織留』では細川満元の旧邸である岩栖院と、それに隣接する崇禪院の地が長乗屋敷になったと記されている<sup>4</sup>。

これらの内容に関して当時の史料に則して裏付けることは難しいが、岩栖院がこの辺りに存在したことは『二水記』などにも記録されている。また、家康が長乗に領地を与えるように関連して、領地に代って鷹狩の許可

<sup>1</sup> 碓井小三郎『京都坊目誌』、1915（『新修京都叢書』第17~21巻、臨川書店再収）。

<sup>2</sup> 白鷺『京町鑑』、1762（『新修京都叢書』第3巻、臨川書店再収）。

<sup>3</sup> 前注1に同じ。「後藤長乗ノ家」の項において後藤丈太郎の説を紹介している。

<sup>4</sup> 狐松子『京羽二重織留』、1689（『新修京都叢書』第2巻、臨川書店再収）。

を願い出たとも伝えられている。『駿府政事録』に依れば、慶長16年に鷹と鷹匠、鷹匠の住まいとして長乗屋敷の門前町（岩栖院町カ）に31坪が下賜された<sup>5</sup>。

長乗は外国語ができたのか徳川家の外交にも従事しており、家康にとって単なる彫金師ではなかったことを物語っている。長乗の手代であった後藤庄三郎も家康から重用され、外交事務を担当した。長乗自身は文化人でもあり和歌を飛鳥井家に、香道と茶道を本阿弥光悦に学んだらしい。

これらの伝承・記録からは、いかに当時の長乗屋敷が広大で、その生活ぶりも優雅なものであったかがうかがえよう。このように考えてみると、長乗が長乗裏町を開いたとするのもまったくあり得ないことではない。直接その成立に関わらないまでも、まだ比較的新しい町の名称として長乗の名が用いられるほどの威勢は有していたのであろう。

### 近代以降の長乗東町

長乗裏町は「長乗裏丁東半」と「長乗裏丁西半」に分離していくが、近世後期ではどちらも上古京上立売九町目組の枝町に所属している。慶應4年に町組改正が行われ、明治2年には上京2番組に所属することとなる。明治初頭の長乗東町の地籍図（図6）を見てみると、街区奥に畠地が確認できるが、明治後期になるとこれらの畠地も宅地へと転じていく。

前述のとおり鞍馬口通は洛中の北端の通りであり、明治

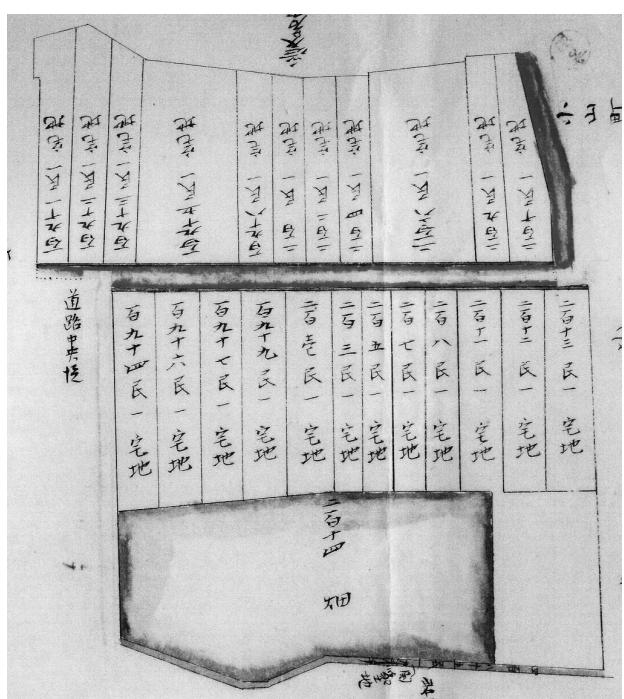


図6 明治10年代地籍図（京都府立総合資料館所蔵）

<sup>5</sup> 『駿府政事録』慶長16年10月2日の項。

以降の長乗東町も京都市と愛宕郡小山村の境界に接していた。京都市の市域は明治期から拡大していくが、北側に関しては大正7年に愛宕郡、野口村、鞍馬口村など周辺郡村が編入されて上京区の一部となった。このように市域が拡大すると同時に上京区・下京区の領域も拡大し、区域の見直しがおこなれるようになる。昭和4年には中京区、東山区、左京区が分区される。それでもなお人口増加を続ける市域では、昭和30年9月に下京区から南区が、上京区から北区が分区されることになった。

この時、長乗東町を含む鞍馬口通沿いの数町は北区に編入された。これと同時に、町が所属する学区の変更も行われる。長乗東町は南方に広がる室町学区に所属していたが、分区により北側の紫明学区に所属替えとなつた。

京都市会において分区が議題として持ちあがるのは実際に分区が行われるわずか二月前、昭和30年6月27日であった<sup>6</sup>。この以前には昭和22年にも分区は検討されていたようだが、実現には至っていない。昭和28年に実験的に区役所の支所が設けられ、拡大した区内で市民への対応に当たっていた。その成果を受けて再度分区が決定されるが、区の境界線について議論が重ねられている。

まず、分区の際の懸案事項として境界線があまりに複雑であること、旧学区や現学区との関係が挙げられている。さらに徴税の観点からは人口格差の是正も求められた。旧学区とは戦前・戦中の京都市の学区（番組）である。この旧学区は行政機能も併せ持ち、小学校の運営維持には学区内の住民が直接携わっていた。戦後は小学校区の統廃合が進むものの、旧学区に対する愛着は根深かった。一方で、現学区に関しても学区が分区により二区にまたがる事態などが懸念されている。

上京区からの北区分区に関しては、大正7年以降に上京区に編入された地域を対象とするという方針が示されている。この方針に従った場合、長乗東町を含む鞍馬口通の両側町は上京区のままとなる。しかし実際には北区に編入され学区も変更されている。このような結果に至った詳しい経緯は現段階では不明であるが、考えられる可能性として学区間の人口問題が存在する。分区以前の調査によれば、長乗東町とともに北区に編入された町々が従来所属していた室町学区は上京区内でも2番目に世帯数の多い地域

であり、人口も紫明学区の約1.5倍であった<sup>7</sup>。郊外部での人口増加が進んだとはいえ、このような学区間の格差を少しでも是正する目的があったのではないだろうか。

このように学区を変更してまで新設区に編入された町は当該地域のみでなく、他の箇所でも行われていたようである。そのため分区後に通学が不便になつたり、転校を余儀なくされる児童が問題視され、分区境界線の見直しを請う請願書もいくつか提出されている。しかし、長乗東町やその周辺町に関してはこうした動きは確認されておらず、比較的スムーズに新設区および新学区への編入が行われたのかもしれない。

他の都市の例に漏れることなく、京都市も近代以降に市街地の膨張が進んでいく。現在の京都市において近世の洛中は概ね上京区・中京区・下京区に一致している。分区が実施される段階においても、地域の歴史的経緯は市民生活の慣習や実態とも沿うところが多いとして重視されていたにもかかわらず、かつての洛中周縁部ではその基本方針に反して新設区に編入された地域も存在したのである。長乗東町もそうした町のひとつであった。

### 長乗屋敷のその後

最後に、長乗東町の名称の由来となった後藤長乗屋敷のその後についても紹介しておきたい。

寛永14年の絵図では長乗屋敷一帯は「後藤七郎兵衛」「後藤又左衛門」「後藤覚乗」など後藤姓の屋敷が並ぶ（図7）。このうち七郎兵衛は長乗の長男、覚乗は次男である。その他の人物も長乗の縁者と考えられるが、このうち長乗

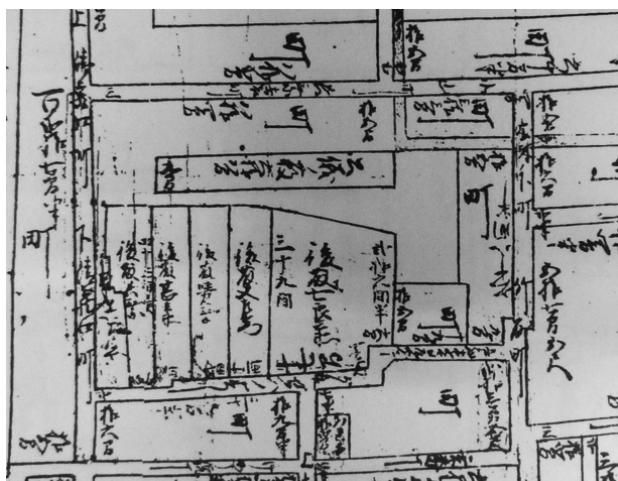


図7 1637年ごろ「寛永十四年洛中絵図」

<sup>6</sup> 『京都市会議録』（京都市役所蔵）。

<sup>7</sup> 『昭和30年度 区界調整協議会』（京都市役所蔵）。

の跡目を継いで後藤勘兵衛家の当主となったのが覚乗である。

この覚乗(初代後藤勘兵衛)の名は建築史の分野では「擁翠亭」という茶室の主として知られている。長乗が文化人であったことは既に紹介したが、覚乗もまた茶の湯をはじめとする文化に親しんだ人物であった。とりわけ小堀遠州との親交が深かったようで、遠州好みの茶室を屋敷内に建て、庭も遠州好みに従って手を加えたと伝えられる。この茶室に関しては天明期に焼失してしまったらしく、起こし絵図が残されるばかりである。さらに天明期の火災の後には紀州徳川家の浜屋敷を移築したという伝承もあるが、当時の史料を欠き、建物も現存していないため事実であるかは定かでない。

这样に長乗屋敷に関する建物遺構は残念ながら現在見ることはできない。ただし、その敷地には現在も「擁翠園」という庭園が残されている。敷地そのものは明治期まで後藤家が所有していたものの、大正以降は他人の手に渡り一時期は三井家も所有していた。戦後には貯金局の敷地となり、平成10年代には民間への払下げが行われた。

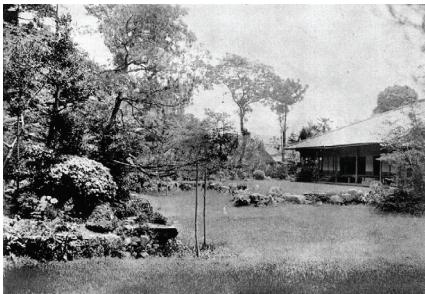


写真1 明治後期の擁翠園



写真2 明治後期の擁翠園



写真3 現在の擁翠園

この際、庭園の保存が危ぶまれたものの、最終的には新たな所有者も庭園保存の意向を示し、現在に至っている。

明治42年の『京華林泉帖』には後藤家所有時代の「擁翠園」の写真が残されている(写真1、2)。本来は池泉回遊式庭園だったようだが、明治後期には荒廃が進んでいた様子がうかがえる。庭園はその性質上、建物以上に現状維持が困難である。そのため覚乗が遠州好みとした当時の姿を現在の擁翠園にどれほど見いだせるかは聊か心もとない。それでも周辺の町名に影響を与えたほどの後藤長乗屋敷の面影が少しでも現在にその姿を留めていることは、地域の歴史を実感するうえでも重要なことだと思われる。

#### 〈参考文献〉

- 稻垣栄三「後藤勘兵衛宅茶室」、堀口捨己編『茶室おこし絵図集』第5集、墨水書房、1964。  
川口陟「後藤家十五代の研究(その一～十六)」、日本刀剣学会編『刀剣史料』15～32、1960～1961。  
京都市編『史料京都の歴史』第6巻、1993。